

シドツチの遺骨出土

江戸中期に幕政を担った儒学者・新井白石が記した「西洋紀聞」の情報源となった、1708年に屋久島に上陸したイタリア人宣教師シドツチとみられる人骨が、東京都文京区の切支丹屋敷跡（都指定文化財）から出土した。同区が4日、発表した。

同区文化財保護審議会の谷川章雄会長（早稲田大教授）は「外国人宣教師の遺骨の身元が分かるのは初めてではないか。日本のキリスト教史にとって極めて重要な発見だ」としている。

シドツチは、ローマ教皇から日本で布教するよう命を受け、屋久島町小島の恋泊に待姿で上陸。しばらく島で過して江戸に移送され、キリシタンを収容する牢獄の同屋敷で白石から尋問を受けた。

シドツチの博識に触れた白石が、世界地理や海外情勢などについて記したのが「西洋紀聞」「采覧異言」で、後の蘭学隆盛に影響を与えたとされる。シドツチは1714年に同屋敷で47歳で死亡した。

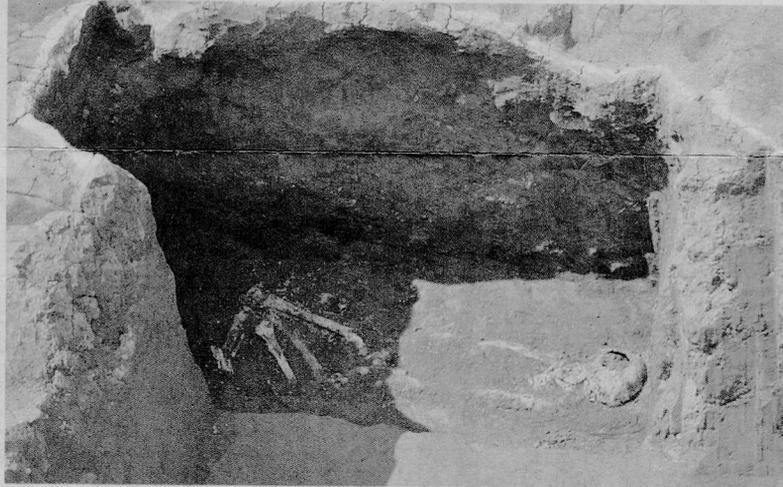
区によると、発掘調査は20

東京・切支丹屋敷跡

14年4〜8月に実施。埋葬跡で出土した3人の人骨をDNA鑑定したところ、うち1人がイタリア人のものと判明した。屋敷が置かれた1646〜1792年に収容されたイタリア人は2人で、文献史料や人類学的分析結果から、埋葬時期や170

台の体格がシドツチと一致すると判断した。

発表に駆け付けたドメニコ・ジョルジ駐日イタリア大使は「今年には日伊外交関係樹立150周年だが、両国の深い関係が数世紀さかのぼれる。シドツチは文化的遺産を残した」と話した。同区は遺骨について「イタリアから返還の申し出があれば対応を協議したい」としている。（種子島時大）



切支丹屋敷跡で出土したシドツチとみられる人骨
―東京都文京区（文京区役所提供）

リアの人たちに広く知ってもらいたい。高潔な人間性、あの時代にキリスト教布教の許可を得るため羽織はかまに刀を差して屋久島に上陸した冒険心、新井白石や屋久島の農民との出会いに関するエピソードなど、興味は尽きないはずだ。

存在証明に感動

シドツチに関する著書「密航」がある屋久島町在住の作家、古居智子さんの話。没後300年以上経過してから、科学の力でシドツチという人物が確かに存在していたことがほぼ証明されたことに感動している。これを機にシドツチが来日した意義を日本とイタ